

音楽表現力を向上させるための言語活動のあり方

ーグループ活動に着目してー

M13EP005

佐野 良彦

1. はじめに

思考力・判断力・表現力を育むことなどに向けた言語活動の充実が叫ばれ、音楽科教育においても言語活動の充実を目指した実践が重ねられている。筆者もこれまでに、言語活動を取り入れたグループ活動を通して楽曲のよりよい表現を目指し、授業実践を重ねてきた。しかし、話し合いながら練習してはいるものの、その活動が実際の演奏にどのように生かされているのか、または生かされていないのかについて疑問を感じながらの実践であった。

では、音楽科においては言語活動がどのように音楽表現力に結びつくのだろうか。本研究では、音楽表現力の向上に向けた言語活動のあり方を検討する。その中で、生徒一人一人の楽曲表現への思いや意図を最もよく生かすためのグループ活動について探るとともに、演奏を客観的に判断するために録音を積極的に活用する。また、実習校の校内研究におけるスピーチの実践も取り入れていく。

2. 先行研究

田畑（2003）による音楽表現を行うための基本能力についての研究がある。田畑は、イメージ力や共感的理解力等が、音を媒介として刺激的に機能し、何らかの行為の意味を決定したいと思うときに「音楽的思考」が現れ、音楽表現力につながるとしている。

一方、津田（2012）は音楽科授業における言語活動と〈音楽〉表現力の関わりについて言及している。津田は、思考・判断した過程や結果を言語活動等で表す力（自分なりの音楽表現への思いや意図を表す力）によって基

礎的な技能を身に付けることの大切さが実感され、〈音楽〉表現力につながるとしている。

そこで筆者は、以上の先行研究から、音楽表現力を「楽曲表現への思いや意図を、音を媒介にして思考しながら、歌唱・器楽・創作で実現する力」と定義して研究を進めることとした。

3. 研究の目的と方法

本研究の目的は、音楽科授業において、言語活動に関わる以下の4つの方法が音楽表現力の向上につながるかについて、グループ活動を取り入れた実践を通して検討していくことである。

- (1) 効果的に思いや意図を外在化させるために、曲想などを聴き取る活動において、「音楽を聴くときに使えることば」として形容詞を用いる。
- (2) グループでの話し合いにおける言語活動を活発にするために、意見の受け止め方や伝え方を確認する。
- (3) 音を媒介にして楽曲表現について思考するために、グループ活動で知識構成型ジグソー法を用いる。
- (4) 楽曲表現への思いや意図が実際の演奏で実現しているかを実感するために、言語活動を用いたグループ活動前後での演奏を録音するなどして聴き比べる。

4. 研究の結果と考察

以下、(1)～(4)で研究方法の具体的な方策を述べるとともに、その方策が音楽表現力の向上につながったかについて、(5)の授業実践で検討する。

(1) 聴取活動での形容詞の活用

音楽活動の基盤ともいえる聴く活動の中で言語力を高めていくためには、まず、どのような曲想なのかについて表せる言葉が獲得されていなければならない。感覚的で捉えにくい楽曲表現への思いや意図を言葉によって外在化させることは、思いや意図を自覚したり伝え合ったりすることを容易にすると考えられる。

そこで、伊藤・光田ら(2012)が用いた楽曲の印象評価を行わせる際の評価語を「音楽を聴くときに使えることば」というプリント(図1)にまとめて配付し、楽曲を聴く活動ではいつでも手元に置いて参考にするように促した。

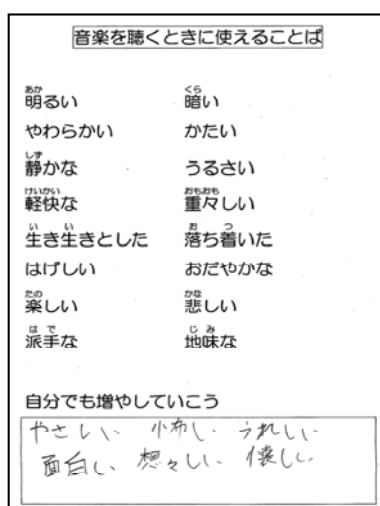


図1 「音楽を聴くときに使えることば」
(伊藤・光田ら(2012)をもとに作成)

図1に挙げたこれらの形容詞を用いた理由は、形容詞を2つずつ対にして並べることで、例えば自分が聴き取った曲想が「明るい」かそうでないかを考えるときに、「暗い」が提示されていることによって、「明るいとは言いきれないが暗くはなく、少し明るい」と考える手助けとなり、結果として聴き取った曲想を言葉で表現する手助けになると考えたからである。また、自分でも言葉を増やせる形にし

た理由は、言葉が増えていくことで、生徒たちは聴き取りの幅が広がっていると実感できると考えたからである。

図1は実際の生徒のものであるが、自分で形容詞を増やしていった様子が見て取れる。聴く活動のときに常にこのプリントを手元に準備させることで、曲想を言語化する語彙を自分自身で増やしていくことができた。

もともと提示した形容詞や自分で増やした形容詞を表現活動の場面で使えるようになることで、音楽表現力の向上につながっていくものと思われる。

(2) 意見の受け止め方と伝え方の確認

グループ活動における言語活動としての話し合いをより活発にするために、意見の受け止め方と伝え方について検討し、「グループ活動で意識してきたいこと」というプリント(図2)を配付した。ここで提示した内容は、協調学習が成立するための前提となるものであり、さらには、それぞれの生徒の自由な発言を保障し、活発なグループによる話し合いが成立することにつながるものと考えられる。

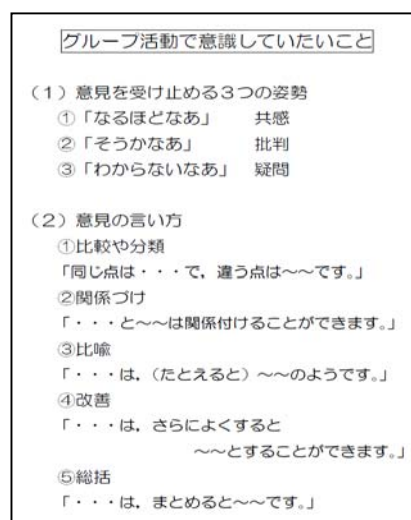


図2 「グループ活動で意識してきたいこと」
(佐藤(2012), 横浜国立大学教育人間科学部
附属横浜中学校(2009)をもとに作成)

図2のプリントの中では、まず、意見を言いやすくするための工夫として、お互いの意見を受け止め合える雰囲気づくりを行うこととした。佐藤(2012)は、「聞き取りメモカード」を用いて、共感・批判・疑問の3つの視点で聞き取る習慣を学校生活や家庭生活で育成すべきだと述べている。本研究では、グループにおける話し合いが他の生徒の意見に対して無関心にならないように、この3つの視点を、意見を受け止めるための姿勢と捉えることとした。

一方、表現への思いや意図、楽曲を聴いて感じたことなどの意見を伝えやすくするための工夫も必要である。横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校(2009)は、言語活動を実践する上でのポイントをまとめて全教室に掲示しているが、その中から、筆者が音楽科の授業でのグループ活動に生かせるだろうと考えた5つに絞って提示した。提示する際には、口頭ではあるが、関係づけとして「8小節目に向けて気分を盛り上げるために、クレッシェンドとアツチェレランドは関係付けることができます」や、総括として「ジョン・ウィリアムスがジョーズのテーマで伝えたかったことは、まとめるとサメが近づいてくる恐怖感です」など、音楽の授業での実際の話し合いの場面を想定して補足を行った。

(3) 知識構成型ジグソー法の採用

筆者はこれまで、生徒一人一人の力を伸ばし、その力を見とるために幾度となくグループ活動を行ってきたが、練習の回数を重ねるにつれてグループ活動は活発にはなるものの、自信をもって活動に参加することができない生徒の存在が気がりであった。

そこで、東京大学・大学発教育支援コンソーシアム推進機構(以下、C o R E F)(2009)が提唱する「活動的・構成的・対話的な学習環境づくり」を目指して、これまでのクラス合唱の練習を、C o R E F(2014)による知

識構成型ジグソー法(以下、ジグソー法)として行うこととした。ジグソー法では、教師などが問いを設定したあと、一人一人がその時点での思いつく答えを考え、同じ資料を読み合ういくつかのグループでそれぞれに理解を深めるエキスパート活動を行う。合唱の練習では、合わせて歌う前のパート練習をこのエキスパート活動と位置づけることができる。その後のジグソー活動は、本来ならば違う資料を読んだ生徒が一人ずつで新しいグループを作るが、各パート一人ずつの少人数合唱は難しいため、本研究では、各パートが集まってクラス全体で合唱を創り上げる練習をジグソー活動として行った。そして、自分たちの合唱の録音などを聴いて客観的に振り返る活動を、一人一人が自分なりに納得できる表現を導き出すクロストークとして行った。最後に生徒は一人に戻り、合唱曲のよりよい表現について記述した。

これまでのクラス合唱の練習では、パート練習で音が取れて歌えるようになると他のパートと合わせてしまうことが多かったが、本研究ではパート練習をエキスパート活動として捉えるため、音を取るだけでなくどのように表現するかについても話し合う。パート練習のように同じことを練習しているときであれば安心感があり、意見を出しやすい雰囲気になると考えたからである。このようにパート練習をエキスパート活動として行うことで、クラス全体で合唱を創り上げるジグソー活動や合唱を振り返るクロストークにおいて自分の思いや意図を持ちやすくなる。

すなわち、一人一人が思いや意図を伝え合うことができるエキスパート活動としてパート練習を充実させることは、音取りの精度を高めるとともに、よりよい表現について意見交換を行うことでクラス合唱の表現力の向上を目指すことができるのである。

以上の考察から、本研究における合唱練習の流れをまとめると図3のようになる。



図3 ジグソー法としての合唱練習の流れ
(C o R E F (2014) をもとに作成)

(4) 録音による活動前後の聴き比べ

筆者のこれまでの表現活動の実践では、グループ活動であってもそうでなくても、生徒に主体的な表現の工夫を求めながらも最終的に教師が表現を整えてしまう傾向があった。従前のこのやり方では音楽表現力を向上させることはできていなかった。なぜならば、生徒が自分の思いや意図をもとにグループで話し合いながら練習しても、いざ表現する段階になると、教師がよりよい表現として一方的に表現方法を伝達してしまうからである。また、生徒は自分たちの表現のどこがどのようになっているかを実感しないまま、発表だけして活動を終えるということもあった。

活動前後に自分たちの録音を聴き比べれば、自らの演奏が対象化されるため、客観的に当該の演奏をモニターするのに役立つと考えられる。さらに、活動前後の演奏を客観的にモニターできれば、そのときの活動の意味をさらに深く理解することができるとともに、次の活動への意欲につながり、ひいては音楽表現力の向上につながると考えた。

(5) 授業実践

①授業の概要

題材の目標を達成するための手だてである研究方法(1)～(4)が、音楽表現力の向

上につながったかを検討するために、実習校である甲府市内公立中学校の第1学年A組の28名を対象として、10月から11月まで授業実践を行った。次ページの表1は、本題材の指導の流れを、研究方法とジグソー法のステップと併せて示したものである。

本題材では、実習校の校内研究との関わりからスピーチの実践を取り入れ、第3時①で付箋を用いた個の意見のやりとりをもとにスピーチメモを作成した。このスピーチメモによって、個の思いや意図がグループによる表現の練り上げにどのように反映しているかが見とれると考えたためである。

②形容詞の活用

本題材では、第2時③に個人で2枚から3枚の付箋に思いや意図を書き込み、第3時①のパート練習に臨むこととした。発言しながらその付箋を貼っていくことで、普段は話し合い活動で進んで発言することのない生徒にも発言の機会が必ず設けられ、しかもその意見が言語としてワークシート上に残せると考えたからである。

図4は、第3時①の活動でアルトパートが作成、提出したワークシートで、個人で書き込んだ付箋をグループで持ち寄って話し合いをした結果である。

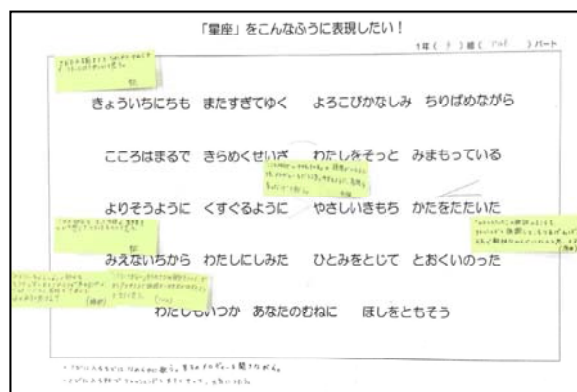


図4 アルトパートのグループワークシート

表1 1年A組「星座」の指導の流れ

題材名	曲想を感じ取り，表情豊かに表現しよう		
題材の目標	歌詞の内容や音楽を形づくっている要素の働きから感じ取った各場面の特徴や曲想をもとに，よりよい表現に向けての思いや意図をもって歌唱表現を工夫することができる。		
教材名	「星座」（混声三部合唱） 長井理佳 作詞／長谷部匡俊 作曲		
	授業の流れ	研究方法との対応	ジグソー法のステップ
第1時	①「星座」の楽曲としての全体像をつかみ，歌詞や音楽を形づくっている要素と曲想との関わりについて話し合う。 ②「星座」の音取りを進め，各パートで歌えるようにする。		
第2時	①クラスで合わせの練習をする。 ②クラスでの合唱を録音する。 ③録音を視聴して個人でよりよい表現について考え，付箋に表現への思いや意図を書き込む。	・活動前の録音 ・形容詞の活用	STEP.1「自分のわかっていることを意識化する」
第3時	①前時に書いた付箋を持ち寄ってパートごとによりよい表現に向けた意見交換をしながら，思いや意図が伝わるように練習すると同時に，リーダーがスピーチをするためのメモをつくる。 ②パート練習の成果を発表し，録音する。	・意見の受け止め方と伝え方の確認	STEP.2「エキスパート活動で専門家になる」
第4時	①前時のパートごとの録音をもとにクラスで意見交換し，クラスでどのように歌うかを話し合う。 ②クラスで合唱し，録音する。 ③クラス全体の合唱である第2時の録音と第4時の録音を聴き比べて，どのように表現が変わったかを話し合う。 ④「星座」を表現するときには注意すべきことを，自分の言葉でまとめる。	・活動後の録音 ・録音による活動前後の聴き比べ	STEP.3「ジグソー活動で交換・統合する」 STEP.4「クロストークで発表し，表現をみつける」 STEP.5「一人に戻る」

さて，付箋に書き込む前の個人のワークシートで，曲想の聴き取りや表現への思いや意図の中に記述された形容詞について見てみると，8割の生徒が形容詞を用いており（ひとつも用いなかった生徒は5人），一人あたり平均しておよそ2.7個（最も多い生徒は7個）の形容詞を書くことができた。生徒が記述した形容詞には次のようなものがあった。

やわらかい，おだやかな，楽しい，元気な，軽快な，生き生きとした，明るい，落ち着いた，静かな，やさしい，なめらか，はっきりと，はげしい，ゆったりとした，悲しい，弾むような，ポップな

下線は筆者によるもので，図1「音楽を聴くときに使えることば」では提示していない形容詞である。これらの形容詞を使った生徒は9人いて，およそ3割の生徒は教師が提示

した以上の形容詞を使っている。

このことから、形容詞を用いることは、個の思いや意図を外在化させることにつながったといえる。

ただ、図4のようなグループワークシートのスピーチメモに形容詞を用いたのはアルトパートだけで、他のパートでは、グループ活動で強弱などの表現手段についてのやりとりが多くなってしまったと見られる。どのような曲想にするかという思いや意図を実現するために表現手段を磨くのだという働きかけが不十分であった。

③意見の受け止め方と伝え方

第3時①でのパート練習の様子を観察すると、意見を受け止める姿勢で示した言葉を返す生徒は多く見られたが、その後話をつなげることができていなかった。「なるほどなあ」のあとに「こういうところが私といっしょです」や「そうかなあ」のあとに「この部分について私はこのように思います」、「わからないなあ」のあとに「この部分についてもう少し詳しく説明してください」とつなげさせるよう促せば、さらに話し合いが活発になったと思われる。

また、図2で提示した意見の言い方を用いている生徒はほとんど見られなかった。実際に学習している場面でそれぞれの伝え方を例示するなどし、実感しながら用いることを積み重ねていく必要がある。

このように、本研究では、意見の受け止め方と伝え方が音楽表現力の向上につながったかについては検証することができなかった。他者の考えをどのように受け止め、自分の考えをどのように伝えるかが分からない生徒が多いという現状を鑑みて、今後の授業実践のなかで継続して取り組みたい。

④知識構成型ジグソー法の採用

本題材では、よりよい合唱を創るためのグ

ループ活動としてジグソー法を取り入れたが、本題材が終了したところで、ジグソー法での練習がクラス合唱をより良くすることの役に立ったかについての調査を実施した(図5)。

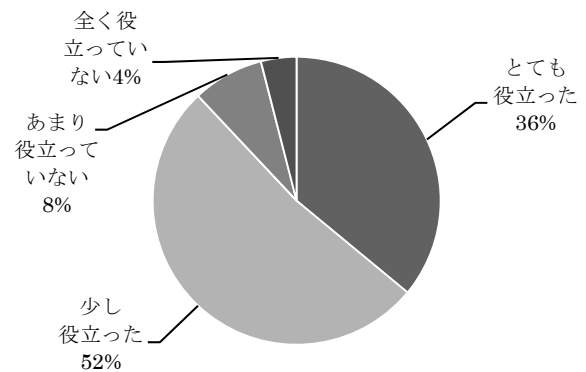


図5 ジグソー法のクラス合唱への貢献度調査(結果)

自由記述には次のようなものがあった。

- i パートで大切なところを言い合い、みんなで話し合ったから、とても頭に入って歌えた。(話し合ったところを)
- ii 話し合いをしたことによって、気持ちのこめかたや強弱をすることがわかった。
- iii ゆるやかに歌う所を、初めは、速く雑に歌っていたが、みんなで話し合った後は、みんなで意識して歌っていた。
- iv 曲のイメージの統一や他の所(パート)がこんなふうだと思ってたんだと感ずることができた。
- v どのグループも、表現について発表したけれど、クラス全体であまり共有されていなかった。

図5と自由記述を見ると、エキスパート活動(パート練習)で表現について話し合ったことは、多くの生徒がクラス合唱づくりに役立ったと感じている。クラス全体の合唱をよくするためにパートで何ができるかという視点で練習し、同じことをやっているパート練習であることから思いや意図を伝え合うことがスムーズにできたためだと考えられる。

また、次に示す図6は、クラスでのジグソ

一活動（第4時①）において、教師が中心となってクラスで意見交換をした結果であり、どのように歌うかをまとめた板書である。

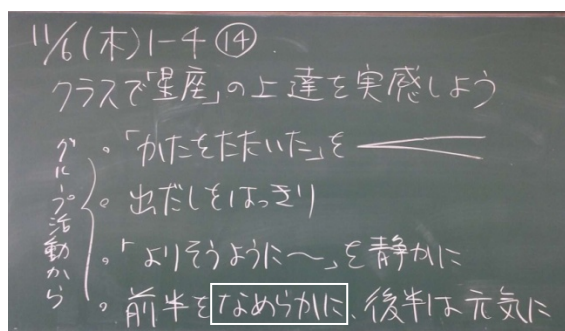


図6 クラスでの意見交換による板書
(□は筆者)

図6を見ると、これまで多く見られた授業のように、教師からの助言によって歌い方を変えるのではなく、各パートの練習の成果をもとにクラス合唱をどのように歌うかについて、自分たちで考えることができている。

以上のことから、ジグソー法は、一人一人の思いや意図の交流を促し、主体的に表現をよりよくするための課題を見つけることにつながっている。このことは、楽曲表現への思いや意図を、音を媒介にして思考していることができ、ジグソー法が音楽表現力の向上に役立ったといえる。

ただ、本実践ではジグソー活動を少人数で行えなかったために、自由記述vのように、パート練習で深めた自分の考えと他のパートの考えを関わらせることが不十分であった。他のパートにつられずに歌える力を付けて少人数で混声合唱ができるようになると、さらに思考が深まり、音楽表現力の向上につながっていくに違いない。

⑤録音による活動前後の聴き比べ

本題材では、第2時②と第4時②でクラス合唱を録音し、第4時③で聴き比べを行った。聴き比べた後に、生徒は次のように記述して

いる。

- ・出だしがはっきりとなり、(前半が)なめらかになった。「よりそうように」は、まだ少し声がかい。
- ・「肩をたたいた」のところが、前と比べてクレッシェンドしている。
- ・前は「よりそうように」のところをてきとうに歌っていたけれど、今はやさしく歌っていた。
- ・初めの方は、出だしがちゃんといえていない。後の方ははっきり初めの言葉がきこえる。初めの方は、「よりそうように～」のところが静かじゃなくて雰囲気伝わってこない。後の方は、なめらかで伝わる。

録音を聴き比べてみると、実際にはその変化はあまり大きくないが、生徒たちは僅かな表現の変化を実感している。活動前に録音を聴いたことで納得しながら練習することにつながり、活動後の録音を聴いたことで実際どこまで変わっているかを熱心に聴き取ろうとしたことによるものである。

このように、活動前後の聴き比べは、活動への意欲化につながるとともに、表現の変化を聴き取ろうとする積極性につながったといえることができ、思いや意図を実現するための原動力となることがわかった。

⑥個の思いや意図のクラス全体への反映

本実践における言語活動では、個の思いや意図がグループ活動へ、そしてクラス全体へ反映されていった。その様子を、アルトパートの女子生徒Kの記述などから分析した。

次ページの表2は、女子生徒Kの記述がグループやクラス全体の意見として反映されていく様子をまとめたものである(下線は筆者による)。

女子生徒Kは2枚の付箋を用意してパート練習に臨んだ。楽曲の前半部分をなめらかに歌うことがよりよい表現につながるのではないかという意見がスピーチメモに採り上げられ、アルトパートの意見として反映されている。思いや意図をより伝えやすくするための

工夫として付箋を用いたことが女子生徒Kの発言の機会を保障し、なおかつ、リーダーを中心にして、グループ活動で一人一人の思いや意図をスピーチメモに反映させようという話し合いができていたからである。

第4時①では、そのアルトパートの意見が、さらにクラス全体の歌い方として採り上げられている様子が見える。

このことから、自分の思いや意図を書いた付箋を持ち寄ってワークシートに貼りながらグループ活動を行うことは、一人一人の思いや意図を表す言語力として、グループ活動やクラス全体に思いや意図を反映させるための手だてになることがわかった。

表2 女子生徒Kの記述のクラスへの反映

<p>第2時③：女子生徒Kの記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さびに入る前までを、<u>なめらかに</u>やわらかくうたったほうが良いと思う。 ・さびの部分をもっと力強く、生き生きとした感じで歌ったほうが良いと思う。 ・「かたをたたいた」は、だんだんさびにむけて、もりあげていったほうが良いと思う。
<p>第3時①：アルトパートのスピーチメモ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さびに入るまでは<u>なめらかに</u>歌う。男子のメロディーを聞きながら。 ・さびに入る所でクレッシェンドを大きくやって、元気に歌う。
<p>第4時①：クラスでの意見交換による板書</p> <p>図6参照</p>

5. おわりに

ここまで、音楽表現力の向上のために、グループ活動に焦点を当てて言語活動をどのように取り入れればよいかを考えてきた。それは、話し合わせただけで言語活動を取り入れたことにし、結局、演奏としての出来映えをよくするために教師が一方的に歌い方を指導してしまうという自分自身の授業スタイルか

ら脱却したかったからである。

本研究では、形容詞の活用やジグソー法、録音の聴き比べなどが音楽表現力の向上に結びつくことがわかった。それは、これらの手だてが、生徒が自分の思いや意図を言葉にしたり伝え合ったりすることで楽曲への理解を深めるとともに、演奏や活動を客観的に振り返ることにつながったからである。

今後も、生徒の思いや意図が音楽表現力につながるような授業のあり方を、実践を通して見出していきたい。

6. 参考・引用文献

笠井健一／水戸部修治／津田正之／白旗和也／弘前大学教育学部附属小学校・編著(2012)「授業における『思考力・判断力・表現力』—学力を伸ばす言語活動—」東洋館出版社 pp.18-23

光田龍太郎／伊藤真／三村真弓／泉谷正則／桑田一也／原寛暁／増井知世子／松前良昌／藤井恵子(2012)「中学校・高等学校音楽科における聴取力育成プログラム開発における基礎的研究(2)—音楽を感受する能力測定方法の検討—」広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要 No.40 p.166

佐藤喜美子(2012)「中学校国語科の書くことの授業改善」平成23年度山梨県総合教育センター「書くこと」の指導の在り方研修会資料 p.12

田畑八郎(2003)「音楽表現の教育学～音で思考する音楽科教育～」ケイ・エム・ピー p.19
 東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構 WEB サイト(2009)「活動コンセプト」
<http://coref.u-tokyo.ac.jp/concept#collabo>

東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構(2014)「大学発教育支援コンソーシアム推進機構」パンフレット

横浜国立大学教育人間科学部附属中学校(2009)「各教科における『言語活動の充実』とは何か—カリキュラム・マネジメントに位置付けたリテラシーの育成—」三省堂 p.30